



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099 (226) 5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円



司教の手紙

社会の最小共同体としての家庭

鹿兒島教区司教 中野裕明

教区の皆さま、お元気で
しょうか。今回も家庭につ
いてお話ししたいと思います。



教会は伝統的に家庭を
「社会の細胞」という風に
理解しています。その誤
は、多くの家庭が同じ問題
を抱えているとそれは社会
問題に発展するし、社会に
問題が起るとそれは家庭
にダメージを与えるという
ことになるからです。例え
ば、家庭内暴力が多発する
と、それは社会問題化と
し、自然災害や戦争勃発、
また経済不況などでも家庭
はダメージを受けます。こ
のように身体とその細胞の
関係のように、両者は密接
につながっているという理
解です。それにはともに共
同体であるという共通認識
があります。

前者は利益追求の共同
体で、後者は家族の幸せを
追求する共同体のことです。
この理解の仕方は、そ
れぞれの共同体が追求すべ
き目的がなんであるかを自
覚することに役立ちます。
さらに、「家族」と「家
庭」の違いについても言及
したいと思えます。まず、
家族とは血縁関係によつて
成り立つものです。そうす
ると、家庭とは、家族が共
に暮らす共同体である、と
言えると思えます。
しかし、必ずしもお互い
の血の繋がりがなくても、
家族のように暮らしている
家庭もあります。ペットを
飼って家族の一員であると
認めていたり、養子縁組で
あったり、養護施設のグル
ープホームのような「家
庭」もあります。また、数
年前に話題になった映画
「万引き家族」のような共
同体もあり得ます。厳密に
いえば、夫婦は元来、血の
繋がりはなかった者同士で
した。「こういうわけで、
男は父母を離れて女と結ば
れ、二人は一体となる。」
(創世記2・24)。教会は
伝統的に、この文句は「結
婚」のことを指しているの
だと解釈しています。(マ
ルコ10・6、8、エフェソ
5・31、32参照)。



班の成長は小教区の成長

久しぶりに班長研修会開催

久しぶりの班長研修会が
4月25日(日)午後、教区
本部で開かれた。研修会を
主催したのはシノドス信仰
部会。今回の研修会は鹿兒
島市内の教会と加世田、指
宿の2教会(鹿兒島地区)

を対象としての開催となつ
た。
午後2時から始められた
研修会では、まず中野裕明
司教が挨拶。司教は教区シ
ノドス開催から1年半が経
過したことに触れ、その上
で「シノドスとは共に歩む
という意味を持ち、鹿兒島
教区が1975年に設置し
た班制度はその共に歩むた
めに最適な仕組み」と話し
た。続けて司教は、「設置
から46年が経過した今、班
制度の理解が主任司祭にも
信徒にも足りなくなってい
る。この研修会を通して、
改めてこの制度に対する理
解を深めて欲しい」と結ん
だ。
その後、永山幸弘神父
(教区本部付)がテキスト

つまり、神は天地創造の
最後に結婚を神のみ旨とし
て制定なさったのです。
「男は、父母を離れて」こ
の文章は、論理的に矛盾し
ています。つまり、男は神
から造られた最初の人間の
はずなのに、突然、父母が
出てくるのはどういう訳で
しよう。

これは生物学的な問題で
はなく、制度としての神の
意志だと解釈できます。
「女と結ばれる」は肉体的
に結ばれる、という意味で
す。こうして子孫が生まれ
ます。「神は彼らを祝福し
て言われた。『産めよ、増
えよ、地に満ちて地を従わ
せよ』」(創世記1・28)
という神のみ旨の実現で
す。
「二人は一体である」こ
の言葉は意味深いです。は
じめは、人間として造られ

たが後で、男と女に分けら
れ、そしてまた、一つにな
ります。性差(ジェンダ
ー)や身分や能力や性格の
違いがありながら、二人は
一体となるのです。
教会の夫婦仲のよさそう
なあるご婦人に尋ねたこと
があります。「ご主人とは
一心一体ですか?」と。
その方は即答しました。
「違います。二心二体で
す」と。

「二人は一体」となると
いうのは「ついに、これこ
そ、わたしの骨の骨、わた
しの肉の肉」(創世記2・
23)と人(アダム)が叫ん
だように、それが実現する
のは「ついに、これこそ」
その、つまり人生の最終時
点で、この特定の人と一つ
になるのかもしれない。
最後に「家族がいても、
家庭がない」という現実を克

6月27日は聖ペトロ使徒座への献金

教皇は毎年、世界各地を訪問し
ます。そして、人々の苦しみや悩
みを聞き、優しい笑顔で力づけ、
数々の援助を与えます。キリスト
の代理者、教会の最高牧者である
教皇は、祈りと具体的な援助を通
じて全世界の人々にいつも寄り添
っているのです。この教皇に心を
合わせて、わたしたちも世界中の
苦しんでいる人々のために祈りと
献金をささげます。教皇のこうし
た活動のために充てられる聖ペト
ロ使徒座への献金は、8世紀ごろ
イギリスで始まった、大人も子
どももいばん小さなお金である1
ペニーを毎年教皇に献金する運動
がもとになって世界中に広まった
ものです。

服するために、家族の意味を
英語から学びましょう。
家族は英語で「Family」
と言います。その意味は、
Father(父さん)、and
(と)、Mother(母さ
ん)、I(私)、Love(愛
する)、You(あなた)と
いうことになります。
ご家族の上に神の豊かな
祝福がありますように。

研修会では、教区本部には
20人ほどが駆けつけ直接話
を聞いたほか、玉里やザビ
エルなどインターネットを
利用して多くの信徒が学習
した。今後、同研修会は教
区内各地で開催される予定
である。

訃報

▼地主敏夫名誉司教
前札幌教区長ペトロ地主
敏夫名誉司教は、今年3月

大熊教会で9人が受堅

大熊小教区(タム神父主任
司祭)では中野裕明司教を迎
え、5月9日(日)のミサの
中で堅信式を行い、9人がそ
の恵みに浴した。



修道会人事

▼ウオラ・ジョバンニ・ド
ン・ボスコ神父(レデンプ
トール会)を4月25日付で
徳之島教会協力司祭と発表
したが、正しくは助任司
祭。

あなたの愛を届けよう
カリタス鹿兒島
郵便振替口座をご利用ください。
口座番号: 02030-2-8359
加入者名: カトリック鹿兒島司教区
※通信欄に「カリタス鹿兒島」と
明記してください。

差別主義と平等主義 (14)

紫原教会主任司祭

山口好信

これまでの連載を少しだけ回顧してみます。元々は「教会」とは信徒の集まり、礼拝のための集会のことでした。信仰による「霊的共同体」が教会でした。その集会の内容は、最後の晩餐のときのイエスの言葉に基づいて聖餐をいただき(エウカリスチア)、愛餐も伴っており、神の言葉の朗読や貧しい信徒の扶助・福祉活動などでした。それが、次第に、聖餐式、ミサだけに変化していった。そのなかで奉仕者だった監督や長老が「司祭」と呼ばれるようになり、司教や司祭が治める「聖職者と聖堂」が教会になっていく。そのため一般信徒は俗なる者、身分の低い者として、教会の運営から締め出されていっただけでなく聖職者に支配されるようになっていった。

ついでに言えば、中世盛期においては、ローマ法における「大逆罪」の概念が教会法学者たちによって取り入れられ、教会権威者に反逆する者、異端者とみなされた者には「永遠の大逆罪」が適用されたのです(印出忠夫)。このように教会の体制、聖職者、ミサは相互に関係しあつて展開してきました。

日常語と遊離したラテン語が知識人エリート(聖職者)の言語となり、民衆が使う国語、俗ラテン語はロマンス諸語(仏語、独語など)になっていった。ミサはラテン語しか認めず、信徒は自由に聖書を読むことは許されな

さで、粗拙ではありませんが、中世、近世の教会とミサのありようは、第二バチカン公会議(1962-1965年)直前まで続きました。ピウス12世(在位1939年-1958年)は「トリエント公会議からの路線を順守することを基本姿勢とし」(森一弘)、第一バチカン公会議によって容認された教皇の教導職の不謬性など宗教的君主制の原理、また権威主義を押し進めました(ヨセフ・ハヤール、アーレティン)。

きぼうの電話相談員として得るものは大きい。「聴ける人」になることを目標に掲げ、電話の向こう側の人々から多くを学んでいる。

きぼうの電話相談員として得るものは大きい。「聴ける人」になることを目標に掲げ、電話の向こう側の人々から多くを学んでいる。

後の司祭はどうあるべきなのでしょうか。「典礼憲章」にも教会の権威とか、司祭は叙階の秘跡によって信徒会衆とは職務の区別があることなど述べています。これらをどう理解したらよいのでしょうか。

歴史を遡ってみますと「ユングマンは『古代キリスト教典礼史』の中で「祭司」(ヒエレウス、サチエルトス)という異教の用語を、キリスト教の司教や司祭に用いることは長いこと避けられていた、はばかられていたと2度も述べています。なぜなら異教における「人と神との仲介者」としての犠牲・いけにえを捧げる祭司は、キリスト教ではイエス・キリストのみであるからです。ようやく2世紀の終わり頃になって「祭司」という語が使われるようになったとユングマンは言っています。

結論から言うと、聖餐式(エウカリスチア)を執り行う司式者は、米田彰男(ドミニコ会司祭)が言うように、「祭司」個人ではなく「信者共同体全体、霊的共同体」なのです(「神と人との記憶」ミサの根源) 2

「祭司」個人ではなく「信者共同体全体、霊的共同体」なのです(「神と人との記憶」ミサの根源) 2

003年。 どういうことか。米田師の書から紹介しますと「イエスは最後の晩餐で「これを記念(アナムネシス)しなさい」と命じた。イエスは新しい儀式を制定する意図のもとに「これを行え」と言ったのではなく、むしろ「私の記念として」を強調したのである。この「イエスの振る舞い」(B)は「旧約のレビ的祭司」(A)と「聖餐式の司式者」(C)を結び付けるか? 祭司職を持つ部族の人がレビ人です。A+B+Cと連続しているとすれば、聖餐式の司式者は祭司ということになるが、果たしてそうか? 否、不連続である。新約聖書に使徒、長老、監督など奉仕職のリストはあるが、そこに「聖餐式の司式者」と呼べるものへの言及は全くない。主の食卓、聖餐はイエスの言葉「これを私の記念として行なえ」に基づくが、聖書の中に見られる奉仕職のリストに「聖餐式の司式者」はない。

「祭司」の称号を与えなかつた。ところが、司教・司祭が「祭司」となっていく。テルトゥリアヌス、ヒッポリュトスあたりから、そしてオリゲネスあたりで、キリスト者の奉仕職にためらいもなく「祭司」の名称を与えていく。しかし「本来の共同体」が祭司職を担う。キリスト者の共同体の全員が「記念」を行なうことが祭司職を行使することになる。聖餐式(エウカリスチア)、ミサは「本来の共同体の中心的行為」である。聖餐式の司式者が現われるのは避けたいことであつたが、先ほど述べたように初代教会において「司祭化」していった。「奉仕者の司祭化」である(59-102ページ)。以上、米田師のこの書はトマス・アクィナス「神学大全」邦訳第44巻の巻末にある稲垣良典氏の解説「トマスの聖体神学」の注にも「注目すべき研究」として紹介されています。

以上から、司教・司祭は共同体全体が聖餐式を執り行い、共同体の皆がそれにあずかるための奉仕をする役である、という慎ましやかなものだと言えます。

森一弘司教は「これからの教会のありようを考える」(女子パウロ会)で「教会憲章」はピラミッド型の構造

と見なされた教会から、神の民としての教会にアクセントを移し、その基本的使命、尊厳、義務と責任に関しては、原則として聖職者を含めて信者全員が平等であることを強調する(86ページ)と述べておられます。「霊的共同体としての教会」は現実的には組織や制度として現れるとしても、根本的には信者全員が平等であるはずで、権威は人に押し付けて、それに従わせるためにあるものではない。権威者の振る舞いを見て、なるほどそうだと人が進んで受け入れるものでなければ、それは「権力」に変わるでしょう。次回でこの連載を終わります。

*参考・引用図書・ポミアン『ヨーロッパとは何か』、印出忠夫「異端禁圧から大逆罪へ」甚野・踊編著『中近世ヨーロッパの宗教と政治』ミネルヴァ書房所収「メディアアトル・デイ」はウェブサイトにバチカンより。ヨセフ・ハヤール『キリスト教史II』、アーレティン『カトリシズム 教皇と近代世界』平凡社。

「祭司」個人ではなく「信者共同体全体、霊的共同体」なのです(「神と人との記憶」ミサの根源) 2

「祭司」個人ではなく「信者共同体全体、霊的共同体」なのです(「神と人との記憶」ミサの根源) 2

「聴く」は「優しさ」
相談員 M・S

きぼうの電話相談員として得るものは大きい。「聴ける人」になることを目標に掲げ、電話の向こう側の人々から多くを学んでいる。

入室前、「少しでも役に立てたのだろうか」と反省する。この繰り返しで何年も過ぎたが、目標は未だに達成していない。

「聴く」とは、相手の想い、考えを自分なりに受け止め、理解することである。「あなたがおっしゃったことは、こういうことかと私は受け止めたのですが」と相手に静かに相手の言葉に耳を貸す。

「聴く」とは「優しさ」なのだ。人は苦悩する時、自らのあり方と内面を深く省みる。そして優しい人になる。「優しさ」とは、相手があるがままに受け入れられることである。受け入れられない人は弱さを見透かされない

人々の涙を拭きたい!
鹿兒島きぼうの電話
Tel.099-223-3399

ために強がる必要もなく、より優れていなくても良く、見捨てられる恐れもないことを知り、自らを大切に思う心で満たさう。自己充足感を感じることは、「聴く」の極意を知ること重要である。

お詫びと訂正

教区報5月号に誤りがありました。以下の通りです。

1面「司教の手紙」1段目「この集会は、聖パウロ・ヨハネ」は正しくは「この集会は、聖ヨハネ・パウロ」。同5段目「マリアはナザレの町でイエスを生んだのでした。」は正しくは「マリアはベツレヘムでイエスを生み、ナザレの町で育てたのでした。」

3面「康由神父の聖書教室」1段目「ヨハネ福音書」は正しくは「ルカ福音書」。5段目(8・10c)は(ルカ5・10)

※お詫びし訂正いたします。広報部

根瀬部集会所との惜別

前小宿小教区主任司祭 鈴木康由

2020年度末を以つて小宿小教区では根瀬部集会所の閉鎖、及び取り壊しを致しました。

これは奄美大島に於ける最終処分場の休業だけでなく信徒数の減少と高齢化、及び小教区全体の経済的問題に起因します。皆さんの中にもこの集会所に思い入れがある方がおられ、それゆえに存続を望まれる方も少なくないことは十分に存じております。しかし残念なことではあります。時

代の流れは今や物理的な建物の存在について私たちに何かを問うているのかも知れません。

本来「教会(エクレージア)」とはその言葉が表すように建物ではなく信徒の集まりを意味します。であれば神様とイエス様を信じる者の集まり、即ち、共同体としての意識に私たちの信仰の原点があると言えます。また、それはミサを大切にすることでもあり

寄付のお願い

瀬留小教区

聖堂が文化庁から登録有形文化財の指定を受けている瀬留教会(主任司祭・宋診旭神父)では、この7月に司祭館の屋根(トタン張り)と司祭館風呂場の改修工事に乗り出すこととした。しかしながら小教区だけでは工事費を賄うことが困難なため、寄付を願うこととし、中野司教もこれを了承し「皆さんの善意を届けて頂きたい」と願っている。

以下、瀬留小教区からの寄付依頼文(要旨)。
教会堂と司祭館は198



うか。またそのためにはどのようにしていけばよいのか。根瀬部集会所がその役目を終えたことにあつて、このようなことを皆様にもお考えになつて頂きたいものです。今回の結果に至つたことに対して小教区内外の信徒の皆さんへ今までの感謝とお詫びを心から申し上げたいと思ひます。(現聖心教会主任司祭)



ルカ福音書の「山上の説教」の冒頭は「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。」です(6・20)。一読すると「神の国は貧しい人々のものであること」から、彼らは幸せである。」ということが書かれているように思えます。では、豊かな人々は神の国から排除されているということなのでしょう。

「貧しい人は幸いについて」といふことは「貧しい人々」とは文字通りの意味だけでなく、「社会の底辺に生きる人々」を含蓄していると考えられます。箴言を踏まえればそのような人たちの生涯には悲惨な災いと

《康由神父の聖書教室(39)》

貧しい人は幸いについて

表現が箴言に見られます。そこには「貧しい人の一生は災いが多いが、心が朗らかなら、常に宴會にひとしい。」とあります(15・15)。

この表現は続く二つの句と比べると違和感があります。なぜなら対義語で表現されてはいないからです(6・21参照)。本来なら「貧

しいけれども豊かになる」と結ばれるのが妥当であるように思えます。そこでこの「違和感」を解決するために旧約聖書を紐解くと、冒頭の一句と似た

て神の国の譬えとして使われる言葉です(5・29、13・29、14・15、24)。

ことです。イエス様が語る「貧しい人々」とは原語では乞食同然の者という非常に強い意味があります。また、この言葉は「無力で何の頼りにもならない」ということも意味します(ガラテヤ4・9)。

す。しかし、そのような生き方をせざるを得なくとも心が朗らかであること、即ち、心が神様に向けて開かれていられるなら神の国での宴會に招かれるということイエス様は言わんとしていると考えられます。

要するに神の国は貧しい人々だけのものではなく、言っていないということ豊かである者が、心が神様に向かつていれば神の国に入ることもできるのです。

+KABAYAN SEKSYON+
Personal na Pag-aangkop ng Salita ng Diyos
 Ngayon, bigyang-pangsin naman natin ang ikalawang aspeto ng ministeryo: ang pag-angkin sa Salita. Dahil ang pari ang ministro ng Salita ng Diyos, hindi lamang sapat na may alam siya rito. Kailangan din pagsikapan niyang gawin itong bahagi ng kanyang buhay. Tulad nang imaheng ginamit sa itaas, ang pari'y kailangang "makipagbuno sa Salita"-kailangang ilubog niya ang sarili niya sa Banal na Kasulatan sa pamamagitan ng pagbabasa, pag-aaral, pagsasabuhay sa hinihingi nito. Kung hindi, siya'y "isang hungkag na mangangaral ng Salita sa iba, dahil hindi niya ginagamit ang puso niya sa pakikinig sa Salita" (Dei Verbum,25).

Ang unang papel ng pari sa ikatlong milenyo ng mga Kristiyano ay bilang guro ng Salita. Ministro siya ng Salita; inatang ipahayag ang Mabuting Balita, upang tulungan ang Bayan ng Diyos na lumago. Sa ganitong pananaw, tila isang "gamit" ang Salita na dapat ingatn at ibahagi ng pari. Subalit may kabaligtaran aspeto ang ugnayang ito. *Iningatan ng Salita ang pari at siya'y pinananatili nito.* Malinaw ito sa mga huling kataga ng pamamaalam ni Pablo sa mga matatanda ng Efeso: "Itinatagubilin ko kayo sa Diyos at sa kanyang salita na nagpapahayag ng kanyang kagandahang-loob. Siya ang makapagpapatibay sa inyo at makapagbibigay ng lahat ng pagpapalang inilaan niya sa lahat ng kanyang pinapaging-banal" (Gawa 20:32).

Totoo nga, makapangyarihan ang Salita. Tulad ng niyebe, paglagpak sa lupa'y di na nagbabalik, aagos na ito sa balat ng lupa't magiging pandilig, gayundin ang Salita ng Diyos (Is 55:10-11).

At sinabi rin ni Papa Juan Pablo II sa *Ecclesia de Eucharistia* na binubuo at itinatag ng Salita ang Simbahan. Kung totoo ito sa kabuuan ng Eukaristiya, totoo rin ito sa Salita. Ang "tinapay ng Salita" ay espiritwal na pagkain na siyang nagpapanatili at nagpapatatag sa pari. Ito ang "pang-araw-araw ng tinapay" ng pari.

Ang Salita ng Diyos sa Buhay at Misyong ng Pari
 (Fr. Dino)

会と催し 6月

- 2日(水) 松森孝郎神父命日(2017年)
- 6日(日) 中野アカデミー・教区本部・19時
- 8日(火) キリストの聖体
- 9日(水) 大口教会聖信式
- 11日(金) みことばを祈る集い・ザビエル教会・10時
- 13日(日) 中野アカデミー・教区本部・19時
- 16日(水) フリチエル神父命日(2016年)
- 19日(土) 年間第11主日
- 20日(日) 泉浩二神父、鄭法鍾神父霊名(聖アントニオ)
- 23日(水) 中野アカデミー・教区本部・19時
- 24日(木) 正義と平和協議会・教区本部・13時
- 26日(土) 年間第12主日
- 27日(日) 奄美の宣教司牧を考える会
- 29日(火) レジオナリエ鹿兒島コミチウム・谷山教会・14時
- 30日(水) 洗礼者聖ヨハネの誕生
- 30日(水) 小川靖忠神父霊名
- 30日(水) 聖ペトロ使徒座への献金
- 30日(水) 聖ペトロ使徒座への献金
- 30日(水) 年間第13主日
- 30日(水) 聖ペトロ使徒座への献金
- 30日(水) シノドス信仰部会・教区本部・14時
- 30日(水) 聖ペトロ使徒座への献金
- 30日(水) コンペンツス・教区本部・10時
- 30日(水) 永山幸弘神父、桃園淳一郎助祭霊名(聖ペトロ)
- 30日(水) 小隈憲士神父、アン神父、貴島丈弥神父、坂本進神父、久保俊弘助祭、小島芳武助祭霊名(聖パウロ)
- 30日(水) 中野アカデミー・教区本部・19時
- 9日(日) 中野アカデミー、16日(日) 中野アカデミー、23日(日) 中野アカデミー、30日(日) 中野アカデミー

祈りの意向
 結婚の美しき 日本教会 召命

教区シノドス これからどう進む⑨

み言葉の分かち合いとは

(2)「み言葉の分かち合い」と「聖書研究」との違い

教区シノドス推進会事務局

長野 宏 樹

「み言葉の分かち合い」は、多くの国の教会共同体において、信者の霊性を深める手段として、重要な役割を果たしてきました。

「み言葉の分かち合い」は、聖書の知識に関する研究とは基本的に異なります。

「み言葉の分かち合い」と「聖書研究」ないし聖書の学習との違いは、日常生活の中で一人の人と人格的に出会うことと、その人について話すこととの違いに似ています。したがって、聖書を中心とした集いを始めたいと考える場合は、まず、み言葉の分かち合いと聖書研究との神学的な相違を理解しておく必要があります。聖書の研究もみ言葉の分かち合いもたいへん有益なものです。一つの会合の中で両方を同時に行おうとすれば、どちらも失敗してしまふ恐れがあります。

1. 聖書研究

・聖書研究をするときには、聖書の著者がその当時の人々に何を語ろうとしたのかを探求するための努力をします。

・当時の人々の日常生活の様子をできるだけ詳しく理解したうえで、彼らが神のみ言葉をどのように理解し、そのみ言葉にどう応えたのかについて調べます。また、当時の人々の言語や文化についても研究します。

・聖書研究会で良い成果を出せるためには、聖書の注釈書や聖書の専門家などの力を借りて細かい準備をしなければなりません。徹底した準備がなければ、無意味な意見

交換の場になる恐れがあります。

・聖書に記録されたことについての「研究」や「討論」をするということは、それらを「分析」することでもありません。

参加者たちは、聖書が書かれた当時の人々の様子や、事件、聖書に込められたメッセージの意味、などについて学び合います。

・聖書を研究(学習)する際には、聖書の本文が教会共同体によってどのように理解され、その共同体はそのみ言葉にどのように従い、どのように生きてきたか、という点を重視します。

・もちろん聖書の注釈者たちは、私たちが聖書をよく理解することを望んでいます。しかし彼らの説明は、聖書に書かれていることが何を意味するかを理論的に示しはして、私たちの日常生活を変えたいというところは少ないです。

以上の説明は、学問的な聖書研究の意味を小さくさせたり、その価値を下げようとする図りなされていくわけではありませぬ。聖書研究には重要な役割があり、絶対に必要

なものなのです。その役割とは、たとえば、

①信仰の教えについての十分な根拠を示すこと

②教会の全ての信者が守らなければならぬ倫理的な規範の内容を明確にすること

③神のみ言葉を歴史の流れを通して理解すること、など

聖書研究は、過去の深い関わりをもっています。たとえば、2000年前にイスラエルで生活した、キリストの「:」について「研究」します。

聖書研究を通してキリストと個人的に出会うことができないうわけはありませんが、み言葉の分かち合いのほ

2. み言葉の分かち合い

み言葉の分かち合いは、私たちの中に現に生きておられる、復活されたキリストとの関わりを大切にします。

み言葉の分かち合いを行う大きな目的は、キリストのみ言葉を「理解すること」だけではなく、愛する人と出会うようにキリストと「直接出会うこと」なのです。たとえば「七段階法」形式のみ言葉の分かち合いに参加する人々は、ベタニアのマリアがそうしたように、主の足元に座り、主のみ言葉に耳を傾けるために集まることになり、ルカ10・38(42参照)。

その集いは、祈り書に掲載されている祈りを唱えてではなく、数名の人がかわるがわる「神さまをお招きするための祈り」をすることによって始められます(第一段階)。

いるといえるでしょう。

み言葉の分かち合いでは、聖書のさまざまなみ言葉を通して神さまやキリストと出会うことができます。聖書の言葉は、復活なさった主の現存を体験させる「神秘的なふるし」*ともなります。グループの中で聖書の一文が読まれるとき(第二段階)、キリストがナザレの会堂で言われた「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(ルカ

4・21)ということばどおりのことが、その参加者たちの間でも実現されます。

聖書は、キリストのみ言葉が成就されていく現場に私たちを導く、開かれた門の役割を果たしてくれれます。聖書を出してゆつくりと朗読することで、神さまや今も私たちがともに生きておられるキリストと私たちがその場で出会うことが、それほど難しくはなくなるのです。

み言葉の分かち合いを行うことによって、私たちは自分たちの間において、主の足元に座り、主のみ言葉に耳を傾けるために集まることになり、ルカ10・38(42参照)。

その集いは、祈り書に掲載されている祈りを唱えてではなく、数名の人がかわるがわる「神さまをお招きするための祈り」をすることによって始められます(第一段階)。

聖書研究

み言葉の分かち合い

聖書研究	み言葉の分かち合い
神やキリストがなさったことを研究する	復活した主と直接に出会い、主の現存を体験する
当時の言語、文化、生活などについて研究する	み言葉を聴いた後、参加者が感じたことや体験などを分かち合う
信仰の根拠についての知識を得る	神からのいやし、なぐさめ、力をいただく
解説や専門家などから学ぶ	神から直接に教えてもらう

4・21)ということばどおりのことが、その参加者たちの間でも実現されます。

聖書は、キリストのみ言葉が成就されていく現場に私たちを導く、開かれた門の役割を果たしてくれれます。聖書を出してゆつくりと朗読することで、神さまや今も私たちがともに生きておられるキリストと私たちがその場で出会うことが、それほど難しくはなくなるのです。

み言葉の分かち合いを行うことによって、私たちは自分たちの間において、主の足元に座り、主のみ言葉に耳を傾けるために集まることになり、ルカ10・38(42参照)。

その集いは、祈り書に掲載されている祈りを唱えてではなく、数名の人がかわるがわる「神さまをお招きするための祈り」をすることによって始められます(第一段階)。

聖書研究

み言葉の分かち合い

次の段階(第四段階)では、沈黙のうちにさらに深く神の現存を体験し、その中に留まることができるよう努めます。

その次(第五段階)には、各自が個人的に特に心に響いた単語や短い文章などに関する分かち合いを、グループのメンバー同士で行います。

以上、「聖書研究」と「み言葉の分かち合い」の違いについて考えてきましたが、これをまとめてみると、次の表のようになります。双方とも、車の両輪のように、信仰を強め、神さまとの交わりを深めるうえで、欠くことのできない、大切なものなのです。

*「起源2000年に向かうアジアの教会 アジア司教協議会連盟 第5回・第6回総会最終声明」(1998・9・18 カトリック中央協議会発行) 頁46

KJP (鹿児島正義と平和協議会) 通信 6月号

福島原発事故から10年(原子力発電について考える)

2011年3月11日に東北方太平洋沖で震度6強の地震が起こり、東北地方太平洋岸は巨大津波に襲われました。福島第一原発には1号機から6号機までの原子炉があり、1号機から3号機は運転しており、4号機から6号機は定期検査中でした。1号機から3号機は自動的に原子炉が停止しました。その後冷却水が喪失し、1号機は水素爆発、3号機で核爆発、2号機も爆発しました。4号機の爆発は謎です。

日本カトリック司教団は2011年11月8日にカトリック教会の立場から原子力発電の危険性と廃止を訴えるための司教団メッセージ「福島第一原発事故という悲劇的な災害を前にして」を発表しました。

その後、日本カトリック司教団は2016年11月11日に司教団メッセージ「地球という共通の家に暮らすすべての人へ―原子力発電の撤廃を」を発表しました。

司教団はその中で「放射性廃棄物の根本的な処理方法はまだ確立されていません。にもかかわらず日本政府は安全が確認されたとするものから再稼働し始めています。さらには、中

断していた新原子力発電所建設計画の再開へと動き始め、原発輸出に向けた動きも加速しています」と述べ、「日本は核エネルギーによる惨禍を経験した国です。1945年、広島と長崎において初めて実戦に用いられた原子爆弾は数多くの市民を無差別に殺傷しました。:中略:こうした経験をへた日本には、世界各地の核被害者と連帯し、唯一の戦争被爆国として:核兵器廃絶を世界に訴え、核問題の解決を世界に呼びかける特別な責任がある」などと訴えています。

教皇フランシスコは2019年11月29日訪日の帰途の航空機内での記者会見で原発についての質問に対して、「他の発電手段であっても、安全性が欠けていれば災害は起こります。です

がそれは壊滅には至らない災害です。原子力発電所の原子力災害は、凄まじい大惨事です。にもかかわらず、安全性は確保されてないのです」と述べておられます。

原発事故から10年経って汚染土の最終的な処理方法は見通しが立っていません。

溶け落ちた核燃料(デブリ)を冷やし続けているため、汚染水が日々増え続けています。東電は建屋周辺の土壌を凍らせる「凍土壁」などで地下水の流入を抑えようとしています。放射線物質を取り除くALPSで処理した汚染水が約1千基超のタンクに保管されていて、東京ドーム一杯分に当たる約25万トンに達しています。それを再び処理し、

海水で薄めて海洋に放出する計画が閣議決定されました。現在の保管量を海に流すだけで30年以上かかる計画です。

(指宿教会 永井勲)

参考文献「私たちの放射線副読本」(とやま原子力教育を考える会)、「日本カトリック司教団メッセージ」(2016年)、「すべてをいのちを守るため」(カトリック中央協議会)、「朝日新聞」(4月14日)

▼社会問題の分かち合い

(毎月第三土曜日)

日時: 6月19日(土) 13時~16時

場所: 教区本部

内容: 原発・改憲・沖縄問題についての情報交換その他

